

Hello we are NVLU

人と動物の健康と幸福を支える



日本獣医生命科学大学 ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター キックオフ シンポジウム



ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター
キックオフシンポジウム

P4

【特集1】令和7年新設！ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター

- ・ワンヘルス・ワンウェルフェアセンターの紹介
- ・ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター キックオフシンポジウムを開催

P8

【特集2】富士アニマルファーム・動物福祉学教室の紹介

P10

【特集3】獣医学部 獣医保健看護学科 創設20周年

P12

【連載】博物館日誌

P14

【連載】スペシャリストへの道

- ・卒業生編 獣医学科 マングース根絶を見届ける 阿部慎太郎(1988年獣医学科卒業)
- ・学生編 動物科学科4年次 岡圭史郎

P17

【News Topics】ニチジュウCAMPUS NOW・データで読み解くニチジュウ

CONTENTS

Hello
we are NVLU

動物とヒトを繋ぎ、都市と地方を繋ぐ架け橋はヒト自身です。
未来につなげるにはヒトとヒトとの繋がりを大切にしなければ
ならず、本大学にとって「繋がり」は強みです。その強みを一言
で表すと「Hello」。
獣医と生命科学の情報発信拠点たる我々が世界にHelloと呼
びかける必要があるのです。

ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター

日本獣医生命科学大学
学長 鈴木浩悦

日本獣医生命科学大学は、明治14年、9人の若き陸軍獣医官によって文京区音羽の護国寺に開学しました。護国寺は、世界初の動物愛護法とされる「生類憐れみの令」を発布した徳川綱吉公が建立した寺院でもあります。当時の日本では殖産興業政策のもと、海外から多様な家畜が導入され、日本の風土に適した品種改良と飼養管理の確立が急務でした。同時に、国外から侵入する伝染病が蔓延し、家畜を診療できる獣医師の育成が強く求められていました。こうした社会的要請のもと、馬医学を修めた陸軍獣医官たちが日本最古の私立獣医学校を設立し、本学の礎を築きました。

その後、獣医学や畜産学を含む生命科学は飛躍的に発展しましたが、物流の国際化により病原体の侵入リスクは高まり、また食料自給率の低い日本では、戦争や災害による食料供給への影響が懸念されています。このような状況を踏まえると、本学が掲げてきた到達目標「愛と科学の聖業」、すなわち「動物を護り育て、人類のために有効に活用する」という使命は、現代においてさらに複雑で重要な課題となっています。したがって、学部・学科の枠を超えた全学的研究体制と、他機関との連携を強化することが不可欠です。

このような背景から、本学は2025年1月、「ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター」を設立しました。「ワンヘルス(One Health)」は、人・動物・環境の健康が相互に関連しているという理念に基づき、総合的な視点から地球規模の課題に取り組む概念です。新興感染症や抗菌薬耐性菌、生態系の変化など、国境を越えて拡大する問題への対応には、獣医学・医学・生命科学の協働が欠かせません。一方、「ワンウェルフェア(One Welfare)」は、人と動物の福祉が相互に支え合う関係にあるという理念であり、動物福祉を通じて社会の倫理観を高め、人々の心身の健康にも寄与する新しい価値観を示します。

本センターは「動物福祉を基盤に、人と動物が健康で幸福に暮らせる社会の実現」を目指す全学的拠点です。伴侶動物・産業動物・野生動物の三部門を設け、それぞれの現場から得られる知見を融合し、国内外のネットワークを通じて社会実装を推進します。これらの活動は、単なる学術研究にとどまらず、教育・行政・産業界・地域社会が一体となった協働の基盤づくりを意味します。

創立150周年を迎える2031年に向けて、本学は本センターを中核に「人と動物の健康と幸福を支える大学」としての責務を果たし、「愛と科学の心」をもって人と動物の未来をつなぐことを目指します。



ワンヘルス・ワンウェルフェアセンターは、

「人と動物が健康で幸福に暮らすことのできる社会の実現」に向け、

学内外で連携して推進することを目的に、2025年1月に設置されました。

また、同センターは、「伴侶動物部門」「産業動物部門」「野生動物部門」の3つの部門で運営しております。

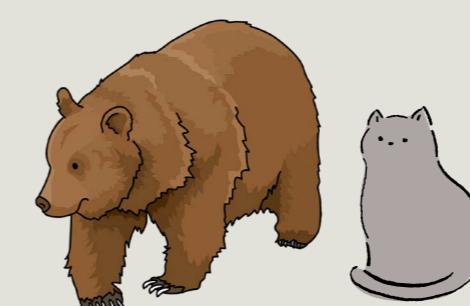
本学がこの分野の教育と研究をリードし、社会に貢献することを目指します。

ワンヘルス (One Health) ってなに？

「人の健康」「動物の健康」「環境の健康」は、深くつながっています。たとえば、動物から人にうつる病気が広がったり、環境破壊により野生動物の暮らしが乱れたりすると、それが人の暮らしにも悪影響を与えることがあります。健康を考えるときは「人・動物・環境」を一緒に守っていくことが大切で、この考え方を「ワンヘルス」といいます。



「人」「動物」「環境」の3つの言葉をキーワードに健康で幸福に暮らすことのできる共生社会の実現を目指します。



ワンウェルフェア (One Welfare) ってなに？

「人の幸せ」「動物の幸せ」「環境の心地よさ」も互いに深くつながっています。たとえば、ペットや家畜が快適に過ごせる環境があれば、その飼い主も心が安らぎますし、自然が豊かな場所では、動物も人ものびのびと暮らせます。このように、「人・動物・環境」が一緒に幸せになれる社会を作る考え方を「ワンウェルフェア」といいます。

産業動物部門

心身ともに健全な動物からの
良質な生産とその最大利用



産業動物部門は、人と動物が健康で幸福に共生できる社会の実現を目指し、科学的根拠に基づいた研究と実践を行っています。心身ともに健全な産業動物から良質な生産物を得るために牧場運営や飼育環境の改善、繁殖技術の向上、効率的な飼養管理技術の開発に取り組んでいます。また、安心・安全でおいしい食品の供給を追求するとともに、代替製品の開発や品質保証も推進しています。さらに、遺伝要因や環境の制御、感染症の予防・治療、人獣共通感染症への対策にも力を入れています。私たちはこれらの活動を通じて、動物の福祉と生産性の両立、そして人々の健康で豊かな暮らしへの貢献を目指します。

—キックオフシンポジウムでのお話

私は、牛や豚などの大型産業動物が「痛み・けが・病気から解放され、健康新生するようにする」ことを目指して研究を行っています。この一環として、現在私が行っている、牛トロウイルスをワクチンベクターとして利用した牛下痢症に対する“万能ワクチン”的開発状況についてお話ししました。

—今後の展望

今後は、同じアプローチを応用し、豚トロウイルスをワクチンベクターとして利用した“万能豚下痢症ワクチン”的開発にも取り組みたいと考えています。このような取り組みを通して、

動物の福祉と産業の両方に貢献できる技術の確立を目指しています。

獣医学科 獣医感染症学研究室
氏家誠 准教授

伴侶動物部門

動物が身边にいて、ともに健康で
幸福に暮らせる社会の実現

伴侶動物とは、人とともに暮らし、伴侶や家族、友達、仲間と同じように位置付けられた身近な動物をいい、コンパニオンアニマルとも呼ばれています。近年ではペットを家族の一員、すなわち伴侶動物ととらえる方が増えており、「伴侶動物部門」では、そんな伴侶動物と人との健康で幸福に暮らせる社会の実現を目指します。



獣医学科 獣医病理学研究室
道下正貴 准教授

—キックオフシンポジウムでのお話

伴侶動物部門では、動物とともに健康で幸福に暮らせる社会の実現に向けて動物福祉、繁殖指導、疾病予防、飼い主支援に向けて取り組んでいます。今回のキックオフシンポジウムでは当研究室で実施した病理解剖症例データをもとに、若齢の犬および猫の好発疾病を紹介しました。

—今後の展望

若齢の犬および猫で好発する先天性疾患、感染症を対象に先天性疾患の原因遺伝子の探索、それら原因遺伝子の診断システムの開発および機能解析、感染症の発症機構の解明、診断システムの開発および予防・治療法の開発に取り組み、疾病予防などに貢献したいと考えています。

野生動物部門

近年、野生動物を取り巻く環境は極めて厳しく、いくつかの種は人為的影響によって個体数が減少し、保護が求められています。一方で、個体数の増加に伴い、人と野生動物の衝突も深刻化し、管理が必要となる動物も増えています。すべての生物が健全な環境で共存できる基盤の構築を目指します。

また、展示動物のアニマルウェルフェアにも力を注ぎます。近年、日本では施設の飼育環境を多角的に評価し、福祉対策が進められています。本部門では、動物園と協力しながら、科学的評価と現場改善を通じて展示動物の暮らしの質を高め、動物の心身の健康に配慮した福祉向上も目指します。



獣医保健看護学科 保全生物学研究分野
島本樹 講師

—キックオフシンポジウムでのお話

野生動物におけるストレス負荷の増加は必ずしも健康を損なうものではなく、むしろ適応的な生理応答であることが示されています。しかし、"ストレス=悪いもの"という一般的なイメージが先行しているため、野生動物と飼育動物におけるストレスの違いについては十分に議論できませんでした。そこで本シンポジウムでは、ストレスから読み取ることや課題を提示し、ワンヘルス・ワンウェルフェアの視点からストレス研究の可能性を紹介しました。

—今後の展望

私の興味・関心は、野外環境におけるストレス反応の機能にあります。ストレス反応の評価手法を確立しつつ、野生動物におけるストレスの意味を解釈することを目指しています。また、ストレス研究の応用として、動物園や水族館で飼育される展示動物においても、福祉的な観点からストレスモニタリングを実施し、彼らがより健全に暮らせるよう支援していくたいと考えています。

3部門の紹介

&

キックオフシンポジウムを開催

11月9日(日)
キックオフ
シンポジウム
当日の様子



センターや部門の紹介に加え、
国立科学博物館の田島木綿子
氏(本学獣医学科卒業生)に
基調講演を行っていただきました。

設立を記念して2025年11月9日に
キックオフシンポジウムを開催しました。
約90人が参加しました!



田中亜紀センター長
挨拶

シンポジウム終了後には、
交流会も実施され、
教職員、在学生、一般の方等、
交流を深めることができました。



研究・教育拠点としての富士アニマルファーム——



富士の大地で未来を耕す

—教育×研究×生産×社会貢献の最前線

靈峰富士の麓、標高1,000mに位置する富士アニマルファームは、豊かな自然環境と清冽な気候に恵まれた日本有数の集約酪農地域の中核を担う教育研究牧場です。1992年に本学の付属施設として山梨県富士河口湖町に設立されて以来、獣医学・畜産学・食品科学の実践教育の場として、数多くの学生に親しまれてきました。

本牧場は「教育」「研究」「生産」「社会貢献」の4つの指針を掲げ、学問と実践の融合を目指しています。教育面では、獣医学・動物科学・食品科学分野の学生が、産業動物の飼養管理・繁殖・衛生に関する実践的な学びを深める拠点となっています。2024年春には新たに「富士セミナーハウスB棟」を開設し、60名以上が宿泊可能な教育環境を整備しました。研究面では、乳牛の周産期疾病(ケトーシスなど)の診断・治療、肉用牛の体外受精卵生産、アニマルウェルフェアに配慮

した生乳生産システムなど、多様な研究を展開しています。また、地域連携による酪農教育ファーム事業や、市民向けの体験講座も準備が進められています。

生産面では、隣接農地の拡張により自給飼料生産の強化を進め、持続可能な循環型農業の実現を目指しています。安全で高品質な畜産物の生産とともに、堆肥の地域還元など、環境負荷の低減にも取り組んでいます。さらに、家畜人工授精師講習会や高大連携事業などを通じて社会貢献活動を推進し、教育・研究・地域社会を結ぶハブとしての役割を果たしています。富士アニマルファームは、自然と科学、地域と大学を結ぶ架け橋として、次世代の動物産業を支える人材育成に努めています。

施設紹介

搾乳牛舎



牛舎での研究の様子



馬の放牧地



動物行動福祉学教室の「適切な飼育」の研究(詳細は右ページ)でも活躍中の富士アニマルファーム★

搾乳や給餌などの実習のほか、研究室の研究・実験などでも活躍する教育研究牧場です。

食堂紹介



富士山を眺めながら食事ができます！

管理人特製の名物ハヤシライス！

手入れの行き届いたピカピカの厨房！

動物にとって少しでも快適な生活の提供や苦痛・苦惱の軽減を目指す研究を行う

動物行動福祉学教室

- Laboratory of Animal Behaviour and Welfare -



准教授 戸澤 あきつ

2025年4月に「動物行動福祉学教室」が新設されました。どのような学問分野を扱っているのでしょうか?

「動物行動福祉学」とありますが、大きく「**動物行動学**」と「**動物福祉学**」に分けられます。

「**動物行動学**」は、動物の行動を観察し、データをとて見えてくる客観的な数値から動物の本能的な行動や生態、そして心理状態について理解していく学問です。

「**動物福祉学**」は、動物の心身の健康状態について理解し、できるだけ苦痛や苦惱を減らすことを考える学問です。

私たち人間は、動物を飼育するにあたってこれまで「(肉体的な健康状態を維持するために)どのような内容の食餌を準備すればいいか」「どのような飼育環境が適しているか」といったことを科学的な側面からひも解いてきました。しかし、そのような学問分野が成熟していく中で、「この方法が本当に動物にとって適しているのだろうか?」と、アウトプットについても考えるようになりました。この“アウトプット”つまり動物の状態を理解しようとする“動物福祉”を捉えるひとつの方法として動物の行動を観察しています。動物の行動を見て、動物の心理状態や健康状態を把握しようとしているのです。

戸澤先生はどのような研究をされていますか?

学問的に説明をすると難しい言葉になってしましましたが、具体的な研究について紹介します。主に、ウシやブタなどの家畜(**産業動物**)と、動物園や水族館で飼育されている動物(**展示動物**)を対象として研究しています。

「**産業動物**」では、例えばブタが自然な行動ができる放牧飼育と、どうしても制限されてしまう屋内飼育とで行動や生産性の比較をしました。ほかには、ウシがトラックで輸送されてきた後、どの程度で通常の生活を送れるようになるか観察したことがあります(輸送ストレスの影響)。

「**展示動物**」では、いわゆる“ふれあい”というイベントは動物(ヤギ、テンジクネズミ)にとって強いストレスになっていないか評価しました。また、展示動物の日々の暮らしを工夫することで、動物たちの本能的な行動や能力を引き出し、ストレスの軽減やよりよい生活を提供する「エンリッチメント」について検討することもあります。

これからどのような研究を行う予定ですか?

動物にとって「**適切な飼育**」についてより追及していきたいと考えています。「適切な飼育」と一言で言っても、物理的な環境、栄養管理や健康管理、同居する仲間との関係、飼育している人との関係、など様々な視点が必要になります。

これから始める研究のひとつに、富士アニマルファームのウシに対するゴム状ブラシの提供があります。ブラシを使ってくれるかどうか、体の汚れはどのように変化するかといったことを調査する予定です。ウシもグルーミングに対する欲求があるので、ブラシがある時とない時ではどのように行動が異なるかを観察します。

動物と人との関係についても研究を始めています。国内の酪農家はアニマルウェルフェアをどのように考えているのか、そしてより受け入れられていくためにはなにがハードルになっているのかを調査する予定です。また、動物園や水族館の来訪者は動物福祉についてどのような認識を持っているのかといったことも理解していきたいと考えています。

学生へ向けてメッセージをお願いします!

動物の病気やケガに向き合っているのは獣医学科や獣医保健看護学科の分野になりますが、「**動物そのもの**」や「**彼らの日常生活**」に向き合うのは**動物科学科**で、学ぶ内容が大きくかわります。動物のこと、そして社会の中での動物の位置付け、人との関係といったことをより深く学び、動物の飼育環境を考えられるのは**動物科学科**ならではだと思います。様々な分野から動物について広く学び、「動物にとってのより良い暮らし」について考え、実践したいという学生はぜひ声をかけてください。

獣医保健看護学科

創設 20周年 Anniversary

獣医保健看護学科は今年、創設20周年という大きな節目を迎えました。2005年の開設以来、本学科は高度な獣医保健および獣医看護専門職の養成を目的に掲げ、2011年からは、学部から大学院博士課程までを有する先駆的な学科として歩んでまいりました。これまでに1,643名の卒業生を社会に送り出し、大学院獣医保健看護学専攻においても、修士104名、博士20名が学位を取得し、動物病院をはじめ、企業、行政、教育・研究機関など、多様な分野で活躍しています。

この20年の歩みは、学生、卒業生、保護者、教職員をはじめ、地域社会や関係機関、そして学科の礎を築かれた先達の皆さま、さらに学校法人日本医科大学のご支援のもとに築かれてまいりました。ここに、学科の発展と共に支えてくださったすべての皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

さて、近年、本学科は国家資格「愛玩動物看護師」養成課程として新たな段階を迎えました。愛玩動物看護師養成に対する社会からの期待は今後さらに高まることでしょう。本学科は、これまでの成果に安住することなく、確かな知識と技術に加えて、「いのち」に寄り添う豊かな感性と倫理観を育む教育を通じ、動物の保健と看護を担う専門職の育成に一層努めてまいります。そして、「動物看護の近代史にその名を留める学科へ」(10周年記念誌に寄せられた池本学長、当時の言葉を胸に、次の10年、20年を見据えながら、皆さまと共に、一步一步着実に歩みを進めてまいります。

今後とも変わらぬご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

獣医学部 獣医保健看護学科 学科長 近江俊徳 教授

創設から完成年度までの道のり

2005年に動物看護師(当時)などの獣医療技術専門職を育成する4年制学科として獣医学部に「獣医保健看護学科」が日本で初めて設置されました。



▲3号棟

創設当初は、個別の研究室がなく、3号棟の1階に机だけが並んでいる状態からスタートしました。

講義室を改造して、3年目に研究室が完成! レイアウトも教員が考え、こうして現在の3部門10分野の研究分野の基盤が完成しました。



▲3号棟2階の基礎部門実験室

創設当初は、教員8人からスタート。
その後22人に増え、現在は20名在籍しています。



▲創設当初に獣医保健看護学科の授業を多く行った「第7講義室」

当初は、研究分野、授業内容、学科独自ホームページなど、ゼロから学科教員と学生で創りあげてここまで来ました。



数字で見る獣医保健看護学科

獣医保健看護学科 卒業生 累計 **1,643名**

愛玩動物看護師 国家試験 合格率 第1・2回 **100%** 第3回 **98.9%**

11/23(日・祝) 創設20周年記念式典を開催

公開講座

公開講座「獣医保健看護学からの招待」～血液型・哺乳類・犬の行動からまなぶ生命のふしげ～を講演いただきました。本学の関係者のみならず、一般の方にも聴講いただきました。

- ▶ 挨拶・獣医保健看護学科の紹介
- ▶ 人とどうぶつの血液型
近江 俊徳 教授
- ▶ はじめて学ぶ哺乳類
山本 俊昭 教授
- ▶ 動物行動学から考える犬の適正飼養
水越 美奈 教授



記念講演・シンポジウム

近江俊徳学科長と石岡克己大学院専攻主任から学科のこれまでの歩みとこれからの展望について講演していただきました。

- ▶ 記念講演(1)
「獣医保健看護学科 20年の歩みとこれから」
—創設当初から現在までの軌跡と未来への展望— 近江俊徳教授
- ▶ 記念講演(2)
「大学院獣医保健看護学専攻の歩みとこれから」
—専攻の成長と今後の役割— 石岡克己教授
- ▶ 卒業生リレートーク・パネルディスカッション
「私たちの現在地」—各分野での活躍紹介
「未来を紡ぐ獣医保健看護学」—参加者による意見交換



卒業生リレートークでは、本学1・2期生の卒業生が学生時代のお話、現在の仕事内容を紹介。

講演の後は会場内の参加者全体で意見交換を行いました。現在大学で教員として勤めている佐伯先生からは、「教育する上で教員として何が大切だと思いますか?」という質問もありました。たくさんの意見が飛び交い、皆さんの熱い思いが伝わってきました。



▲乾杯の音頭は、創設時からいらした向山明孝元教授



▲先生と久しぶりの再会



▲学科創設時の池本元学長に近江学科長から感謝状を贈呈



▲参加者全員に20周年オリジナルグッズのケースとお米、本学開発のコンビーフをプレゼント

祝賀会・交流会

同窓生やお世話になった先生方との久しぶりの再会。
ご退官された先生や創設時の学長、同窓会長等、獣医保健看護学科に携わった方々が参加してくださいました。



博物館活動日誌

2025年 6月
▼
2025年 10月



TOPICS 1: 予約無しでの見学が可能となりました!

2015年の開館以降、当館をご見学の際は事前の予約をお願いしておりましたが、2025年7月23日より、予約無しでご見学いただけるようになりました。現在は開館日の開館時間内であれば、どなたでも自由にご見学いただけます。お近くにお越しの際など、お気軽にお立ち寄りください!
※ご見学の際は正門正面の守衛所にて見学希望の旨をお伝え下さい



日本獣医生命科学大学付属博物館は、一号棟を拠点に様々な活動に取り組んでいます。
2025年6月から2025年10月までの活動の一部を紹介します。

【活動日誌 252】2025年6月21日公開 ミニ展示「長次郎の再出発」が始まりました



6月21日は世界キリンの日(World Giraffe Day)です。世界中の動物園などで関連イベントが開催されるこの日にあわせ、当館でもキリン「長次郎」を主役としたミニ展示を開始しました。長次郎に関連した冊子や絵葉書と共に、長次郎の頭蓋骨と頸骨を展示しています。



展示室の様子

【活動日誌 255】2025年7月5日公開 2025年度学芸員課程実務実習：標本の作成

4月以降、土曜日を活用して学芸員課程の学内実習(実務実習)が行われています。実務実習は複数の教員によるオムニバス形式となっています。この回は、本学で生涯学習概論を担当されている馬谷原先生にご指導いただき、さく葉標本とチョウの標本を作成しました。



展示の導入部分の様子

TOPICS 2: キリン「長次郎」の歩みが本になります!

「長次郎」は上野動物園で生まれ、井の頭自然文化園に引っ越ししたのち、本学で骨格標本となったキリンです。これまで当館では長次郎を度々取り上げて来ましたが、この度、2024年に開催したイベント「キリン講話会」の内容をもとにした書籍の出版が決まりました。本書では、当館の石井学芸員が講話会でも紹介した長次郎の歴史をさらに詳しく掘り下げるとともに、講話会にてご講演いただいた4人の先生方に、様々な角度からキリンについて語っています。

【タイトル】キリンが来た道 麒麟児 長次郎の歩み

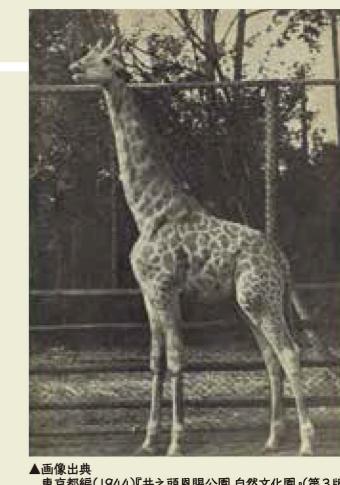
【発行日】2026年3月初旬発売予定

【監修】日本獣医生命科学大学付属博物館

【著者】石井奈穂美・郡司芽久・川田伸一郎・清水勲・齋藤美保ほか

【発行】工作舎

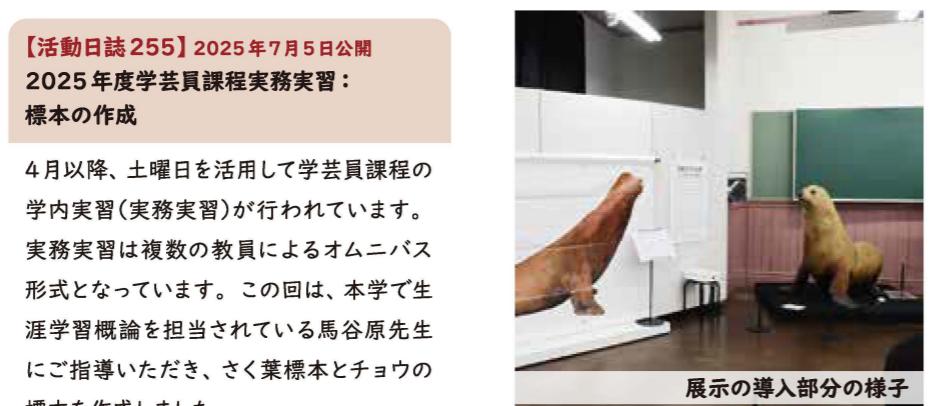
QRコード
詳細は[こちら](#)



▲画像出典
東京都編(1944)『井之頭恩賜公園 自然文化園』(第3版)

【活動日誌 260】2025年7月26日公開 ミニ展示「日獣大アシカ展～なぞの標本と日本の鰐脚類～」が始まりました

7月21日のオープンキャンパスから、ミニ展示「日獣大アシカ展～なぞの標本と日本の鰐脚類～」が始まりました。この展示では、鰐脚類の中でもアシカ科の動物を主役としており、当館に集まった2体の鰐脚類の「なぞの標本」の種同定のための調査の様子を紹介しています。その他にも、最後の確認から今年で50年の節目となる二ホンアシカについても、世界唯一の二ホンアシカ雄成獣剥製の実物大に引き延ばした写真などの資料を展示しています。



展示の導入部分の様子

【活動日誌 264】2025年8月16日公開 ワークショップ「武藏野動物観察隊5 “一号棟のキリン”と日獣大探検ツアー」

に講師として参加しました

武藏野ふるさと歴史館との連携事業の一環で8月7日に開催されたイベントの講師を、当館スタッフ2名が担当しました。当日は市内在住・在学の小学生の皆さんに、本学にある2つの実習室(食品製造実習室・模擬動物病院)と博物館を案内しました。



【活動日誌 268】2025年8月30日公開 昆虫標本のデータ整理を進めています

本学のサークルである野生生物研究会に所属するみなさんと、博物館に寄贈された昆虫標本の整理作業を行いました。



【活動日誌 274】2025年10月16日公開 米国の大學生の方が来館されました

日本医科大学が協定締結を進めているジョンズ・ホプキンス大学(Johns Hopkins University)から獣医師であり比較病理学の専門家でもあるKathleen Gabrielson先生(DVM, PhD, DACVP)が来日され、本学にて講演を行われました。講演に先立ち、大学と博物館の見学会が行われました。



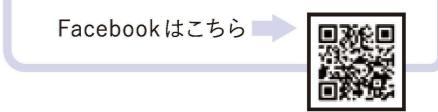
【活動日誌 276】2025年10月30日公開 学内のサークルとの連携活動

野生生物研究会に所属するみなさんが、大学祭にて当館所蔵の骨格標本を活用した展示を行うことになり、まずは準備として標本のクリーニング作業を行いました。当館は作業場所や道具などを用意する形でサポートし、学生たちがみんなで話し合いながら、自主的に作業を進めました。



「活動日誌」について

博物館公式Facebookにて、日々の活動をまとめた「活動日誌」を開いています。2020年10月の公開開始から、これまでに270件を超える日誌を公開しました。このページに掲載した「活動日誌」は、Facebookにて公開した活動日誌に加筆修正を加えた特別版です!



日本獣医生命科学大学付属博物館 基本情報

【開館日時】火曜日～土曜日 10:30～17:00

(最終入館および物販は16:30まで)

【休館日】日曜日・月曜日・祝日・年末年始、
大学の定める休日(その他臨時休館あり)

【入館料】無料

【入館方法】開館日時にあわせて
直接博物館までお越しください

※開館日程は事前の告知なく変更になる場合があります

QRコード
WEBサイト

QRコード
来館案内



THE ROAD TO SPECIALIST

卒業生編

道

1988年 日本獣医畜産大学獣医学部獣医学科卒業
1988年 (株)野生動物研究所 研究員(奄美大島)
1999年 環境庁(当時)へ転職(那覇自然環境事務所 主査)
2001年 環境省奄美自然保護官事務所 自然保護官(奄美大島)
2007年 那覇自然環境事務所野生生物課 課長補佐(沖縄)
2014年 生物多様性センター 調査官(山梨)
2017年 中国四国地方環境事務所野生生物課 課長(岡山)
2020年 奄美群島国立公園管理事務所 所長(奄美大島)
2024年 同事務所 国立公園保護管理企画官
2025年 定年退職

本学の教育理念は「愛と科学の心を有する質の高い獣医師と専門職及び研究者の育成」。
獣医、獣医保健看護、動物、食品に関する専門職(スペシャリスト)の道を歩むことを目指す学生の活動と既に歩んでいる卒業生の活躍を紹介します。

奄美大島のマングース根絶を見届ける—

獣医学科卒業

阿部 慎太郎 Shintaro Abe

—学生時代、どのようなことがきっかけで野生動物に興味を持ちましたか?

1982年に日本獣医生命科学大学(当時:日本獣医畜産大学)に入学し、野生生物研究会というサークル活動で毎週末に東京都檜原村に通い、ニホンザルの群れを追いかけ、調査をしていました。広い山林の中では、簡単に群れを発見できないことが多く、1日中山を歩き、山梨県の集落に辿り着くものもありましたが、何も成果がない日も多くありました。調査の際に「最近、サルの群れは見えませんか?」など地元の農家さんに聞き取りをするのですが、地元では農作物の被害が深刻なことから「サルなんてみんないなくなってしまえばいい」と言われてしまうのです。私はサルが好きでサルに会いたくて山に通っているのに、地域に住んでいる人たちのサルへの嫌悪感は悲しいものがありました。これがきっかけでどこでもいいから田舎に行って、地域の人と野生生物のギクシャクした関係を取り持つようなことができないかと思うようになりました。

—なぜ奄美大島に移住し、マングースの問題に直面したのでしょうか。

大学3年生で野生生物研究会の部長をやっていた際、顧問の先生が定年で退官のため、次期顧問の先生を探していました。その時に和(にぎ)秀雄先生に出会い、この出会いが奄美大島に移住したきっかけになります。和先生は、全国で初めて獣医学科に野生動物学の研究室を開設した先生です。また、和先生は奄美大島の出身で、先生から「奄美大島で実験用サル類の繁殖施設の会社を作る予定だが、奄美大島に行く気はあるか」と聞かれ、田舎で働きたかった気持ちと、和先生と将来奄美大島の野生生物の調査研究に取り組みたいという気持ちがあり、奄美大島へ移住、野生動物研究所への就職を決心しました。

そして、奄美大島の就職先で付き合いのある土建屋さんとご飯を食べていた時に畑でマングースが増えているという話を聞いたのです。

—島で知り合った3人で始めた奄美哺乳類研究会

まずは、なんで奄美大島にマングースがいるのか、いったいどういう状況になっているのか調査を開始しました。昼間は野生動物研究所で仕事をして、夜な夜な地元の新聞社に通って、過去のマングースの記事を探しました。1989年には島で知り合った新聞社の方と動物病院の獣医さんの3人で奄美哺乳類研究会として調査を始めました。分布や農業被害に関する聞き取り調査や手作りの捕獲用のカゴなどで捕獲調査を実施しました。調査結果からマングースを排除する必要性を訴え、1993年からは市町村が有害鳥獣捕獲を始めてくれました。その捕獲数は、毎年1,000~1,500頭ほどが捕獲され続けていましたが、マングースは増える一方でした。



▲特定外来生物フリーマングース



▲マングースの食害の証拠写真

1980年代末期頃、アマミクロウサギやアマミヤマシギ、アマミシカワガエルなどがたくさんいる素晴らしい森「金作原生林」が奄美市名瀬近郊にあるのですが、この森でもマングースの影響が深刻で、これらの生きものたちは次第に見ることができなくなっていました。金作原周辺は景観こそそばらしいものの、野生生物はほとんど見ることができない「死の森」になっていたのです。

—環境庁のモデル事業から駆除本格化、そして転職

様々な関係者の後方支援もあって、1996年からは環境省(当時:環境庁)ではモデル事業としてマングースの影響調査が開始されました。きちんと捕獲したら、どのくらい捕獲できるのかという試行的な駆除も実施されました。この頃、環境庁として国が対応する必要がある野生生物の保全対策のために、全国の中でも重要な地域に野生生物保護センターの設置を進めていました。奄美大島でも野生生物保護センターの設置の動きが出ていた中で、保護センターに勤務する、地域の野生生物に詳しい人材を探していました。偶然、私もその候補の一人となり、面接を受けて1999年10月に採用されました。環境庁がきちんとマングース対策をすべきと訴えてきた立場から、自分が対策を進めなければいけない立場になったのです。一方で私が奄美大島に来たのは、和先生とのつながりがあってのことでしたので、私が転職するということは和先生の作った会社を辞めるということでもあり、自身の中でも葛藤がありました。先生の作った会社を辞めて転職するからには、マングース対策できちんと結果を出さないといけないと思いました。

—捕殺わなの試行と外来生物法

環境庁(当時)は2000年度から駆除事業を開始、私は2001年1月から奄美野生生物保護センターに勤務、マングース対策や希少種保護などの仕事をしていました。マングース事業では有害鳥獣捕獲からの報奨金制度が継承さ

れていましたが、2004年には外来生物法が制定、1年後の2005年から法律が施行され、時代がようやく外来生物の問題性を認識して法律の制定にまで到達しました。侵略的な外来生物についてはきちんと管理されるべきだし、野生化してしまった種については根絶も含めて厳正に対処していく必要があることから、法に則り問題がある種のいくつかについては特定外来生物として指定して、防除を実施していくことになりました。それまでの有害鳥獣捕獲や環境省の駆除事業も、鳥獣保護管理法に基づく対応でしたが、新しく外来生物法ができたことで予算規模も拡大し、外来生物対策が前進することになります。

—奄美マングースバスターズの活躍

2004年に環境省本省の担当者から、外来生物法の目玉でもあるので是非マングースを根絶して欲しい、そのための計画案と予算案を作ってくれと電話がありました。奄美大島の山の中に長いフェンスを建てて島を十分割する計画を立てて要望しましたが、十分な予算を獲得することはできず、フェンス建設を断念しました。代わりに捕殺わなを広域に密に仕掛け、それらを管理する人たちを雇用し、彼らを「奄美マングースバスターズ」と呼ぶことにしました。

2005年度からは奄美マングースバスターズの丁寧な仕事の蓄積で、マングースの捕獲数は大きく減少することになります。そして2007年3月に私は那覇の事務所に異動になってしまいます。山梨に異動してからは、プライベートで休みを取って奄美で開催されるマングース検討会にオブザーバーとして参加していました。2013年度には年間130頭にまで減少、2016年度には年間28頭そして、2018年度には4月に1頭を捕獲したのみとなつたのです。こうして長期に渡るマングース防除のとりくみは、ひとつのハードルを越えることができました。

—マングース根絶宣言

しかし、マングースが捕れなくなったこと、マングースが根絶できたことは違います。どうやって根絶できたと評価できるかを検討する必要があります。すでに捕獲が途絶えてから2年以上が経過した2020年7月、私は再度、奄美の事務所に着任しました。マングースが捕れなくなった後も、わなの点検や探索犬での搜索、自動撮影カメラでの監視など、引き続きマングースを検出しようという努力はバスターズによって継続されました。どのような評価により根絶と判断するのか、研究者らによる評価手法の検討状況も踏まえた新たな防除実施計画を立てつつ、この間も引き続きバスターズによるモニタリングは継続されました。



▲2005年6月、外来生物法の施行とともに結成されたチーム「奄美マングースバスターズ」

同窓会 ホームカミングデーでご講演いただきました



11月3日(月・祝)に同窓会企画 ホームカミングデーで特別講演を行っていただきました。

本学の大学生時代だった頃のお話やマングース根絶までの道のりをお話してくださいました。

また、講演会に合わせて、昨年11月から今年の5月まで付属博物館で開催されていた奄美大島の動物たちをテーマにした特別展「NVLU奄美プロジェクト -研究・保全・そして未来-」からリバイバル展示を行いました。



同窓会では、医獣祭を後押しするため、ホームカミングデーを実施。世代を超えた繋がりを深める場として開催されています。

▲全国の同窓生からご当地のお菓子が送られてきました!

ホームカミングデーは毎年開催されています。同窓生皆様、お気軽にお立ち寄りください!



▲学長もご覧されました



▲マングース根絶宣言記者会見後の慰労会

そしてついにモニタリングデータ等を用いた2つの評価手法による根絶確率の推定結果がマングース検討会で示されました。検討会の意見を踏まえて、2024年9月に環境省としてマングース根絶を宣言したのです。根絶までにマングース対策で人間が奪ってきたマングースの命の数は32,000を超えます。私がマングースの定着を知った1988年秋から根絶を宣言して実を結んだこの日まで、およそ36年間です。社会人としての人生の多くのをマングース対策に関わってきましたが、このような結果を迎えたのは、奄美マングースバスターズを筆頭に有害鳥獣捕獲や報奨金制度に関わってくれた地域の方々、そしてマングース検討会委員やその他関連の研究者、環境省奄美野生生物保護センターの歴代スタッフなど、本当に多くの方々の協力の結晶にはなりません。本当にありがとうございました。様々な取り組み結果の丁寧なデータ蓄積がその証じですし、データ蓄積によってこの日を迎えることができました。とても嬉しいですし、誇りに思います。

—最後に

2025年3月、私は定年退職で環境省を引退しました。ただ檜原村のニホンザルを好きになっただけの若者が、本当に数奇な運命の導きもあって奄美大島に来ましたし、マングースの定着を知り、調査、対策を経てみんなの力で根絶を成し遂げることができました。引退後も少しは奄美に関わっていきたい気持ちもありますが、あんまり目の上のたんこぶにはなりたくないかもしれません。奄美の自然環境の課題はまだたくさん残されているし、それらの解決や保全と活用のあり方については、若い世代が模索しながらいろいろ考えて活動してくれる事を期待します。自分としては、まずは一旦の区切りしたいと思います。島の皆さんのが島のすばらしい自然環境に誇りをもって、うまく共生していく地域になっていくことを期待しています。

加えて、これから獣医を目指す皆さんに知っていただきたいのは、私たち人間の不用意なペットの管理の結果が本来の地域の生態系を壊し、その地域の野生生物を絶滅に追いやっているという事実です。もちろん、ひとつの命を救うことは大切です。しかし、私たち人間も地球の歴史の中で生まれてきました。地球上に生まれたすべての種が、私たち人間のせいで絶滅に追いやってしまうことがあります。獣医師はペットの飼い主さんたちに、この大切さをきちんと理解してもらう責任があります。人間と動物、環境の三者の健全性を守るために皆さんの活躍を期待しています。

同窓会では、医獣祭を後押しするため、ホームカミングデーを実施。世代を超えた繋がりを深める場として開催されています。

ホームカミングデーは毎年開催されています。同窓生皆様、お気軽にお立ち寄りください!

▲学長もご覧されました

スペシャリストへ道

学生編



何事にも積極的に
人と関わりを大切に――

農林水産省 畜産系技術職(内定)
動物科学科 4年次
岡 圭史郎 Keishiro Oka

――農林水産省 畜産系技術職員に内定とのことです、目指そうと思ったきっかけを教えてください。

元々は牧場の現場や又は自分で牧場を立ち上げたいと思っていましたが、3年次に「キャリア形成支援講座」という、外部の講師による講義で、農林水産省に勤めている方が来てくれたことがきっかけで公務員として畜産業に貢献できることを知りました。

――就職するために実施してきたことはありますか?またなぜ農林水産省に就職しようと思いましたか?

1年次から牧場へ実習に行き、またサークル活動に積極的に取り組み、畜産業、特に酪農について学びました。その過程で、当初は意識していなかった畜産業が抱える課題を知ることになり、今まで当たり前のように存在していた産業に対して危機感を感じるようになりました。しかしその一方で、産業としての重要性や強み、そして、畜産業が持つ可能性とそこで働く人たちの魅力も知ることになりました。以上のような経験を通して、課題の解決に努め、畜産業の明るい未来を農家の方々と共に切り開いていきたいと考えたからです。

――研究室では、何を研究していますか?

動物社会科学教室(食料自然共生経済分野)に所属し、神奈川県相模原市佐野川地区を対象に鳥獣被害対策を研究しています。鳥獣被害は金額的な被害だけでなく、営農意欲の減退、生活上の脅威など、数値には表せられない被害もあり、中山間地域の存続と持続的な発展のためには、

解決すべき課題です。獣害対策として、地域ぐるみの対策が推奨されていますが、実施できていない地域は多数あります。また、野生動物は人の生活圏を越えて移動をするので、単独の集落での対策だけでなく複数集落単位での獣害対策が求められることもあります。私の研究では、地域住民へのアンケートを基に住民の認識・認知を調査して、地域ぐるみでの獣害対策、複数集落単位での獣害対策の推進を行っていく上での課題を明らかにし、その解決策を模索していくことを目的としています。

――うし活Jr.という酪農家と交流するサークルに入っているとお聞きしました!

コロナ禍の影響でサークル活動が停滞していて、先輩からの十分な引継ぎも無かったため、どんな活動をすればいいのか、どのように計画・実施をすればよいのか分からずだらけでしたが、同級生や後輩、酪農家の方々など、本当に沢山の方が自分の考えや想いに共感してくださり、そして協力をしてくれたおかげで再びサークル活動を活性化させることができました。酪農家の見学会やいただいた肉で調理会、2月には酪農のお話やバター作り、牧場の紹介など酪農の魅力を知ってもらうイベントを企画しています!

――スペシャリストを目指すためにしていることや努力したことを教えてください。

勉強です。本や新聞を読むことだけでなく、様々なことに積極的に挑戦すること、たくさんの人と関わる事も勉強だと思います、何事にも真摯に取り組むことを心掛けています。実習やサークル活動に積極的に取り組んだのもそのためです。



▲うし活Jr.サークルでお世話をした北海道の酪農家さんと!

これまでの大学生活での取り組みを通して、産業などについての知識や理解が深められたことは勿論ですが、例えば対人能力や自分の考え方や思いを言葉にする力などの向上にも、とても役に立ったと思っています。勉強は一生涯取り組んでいくものですし、その重要性も変わることはないと私は思います。社会人になってもその姿勢を継続していくつもりです。

――どんなスペシャリストを目指していますか?

信頼されるスペシャリストです。有意義な交流を図っていくため、農家の方々が安心して生産業に務めることが出来るようにするためにとても大切なことであると考えています。これからも色々なことに挑戦し、成果を上げていくことで、この人なら任せられる、この人なら成し遂げてくれるという期待と信頼を寄せられる人になりたいです。

――最後に在学中、または将来入学する学生へメッセージをお願いします!

私が伝えたいことは、「自分の好きなこと、興味があることには遠慮せずに積極的に取り組み、そして色々な人と関わること」を心掛けて欲しいということです!そして、それらの取り組みの中で、「自分の考えや想いを言葉にすること」がとても大切だと思います!

私は高校まで消極的な性格でしたが、大学に入学してから、このままでは何も進まないなと思うようになり、何事にも勇気を持って取り組んでみようと考えるようになりました。周りの方は意外と、皆さんに寄り添い、協力してくれると思います。

何事にも一生懸命に積極的に取り組む姿勢が大切な出会いや素晴らしい経験を積むこと、さらには自分自身の成長に繋がり、そして、自分の考え方や想い、将来やりたいことが明確になってきます。行動の意味や価値を考えることも大切だと思いますが、考えすぎや、意味がないと勝手に結論付けてしまって何もしないよりも、取り敢えず挑戦することも大切です。若者の強みは、素直さと元気さであると私は思います!無理をする必要はないと思いますので、自分のペースで頑張ってください!

CAMPUS NOW ニチジュウ News Topics

学生相談室主催 ワークショップを開催しました!

学生相談主催のワークショップが開催されました。このワークショップは、仲間作りや学業への関心を深めることができますように、学生同士や教員とコミュニケーションを行う場を提供することを目的として開催されています。

食品科学科 三浦孝之准教授が「木の匙作り」、獣医学科 片山欣哉准教授が「羊毛フェルト作り」を開催しました。

▼完成した木の匙で乳肉利用学教室所属の学生が作製したアイスクリームを試食!アイスクリームの味は、ラムネ、紅茶等6種類もの味がありました。



▼完成!

~羊毛フェルト作り~

本学付属牧場 富士アニマルファームの羊から刈った羊毛を使用して羊毛フェルト作りを実施しました。



▲個性豊かな羊毛フェルトが完成!

食品科学科 畜産食品製造学実習



▲豚の半丸枝肉の解体

3年次に開講される食品科学科 畜産食品製造実習。

豚の半丸枝肉を実際に見て、部位の名称や食品の加工方法、食品加工の機器操作方法を学びます。

実習最終日には、実習で作製したハム・ベーコン・ソーセージを使用して班で好きな料理を作って試食しました。



▲実習で作製したハム・ベーコン



▲ハムの形を整えて紐をくくります



▲ハム・ベーコンを燻製



▲機械で薄くスライス



▲作製したハム等を使用して調理しました

医獣祭&オープンキャンパス

11月1日～3日に日本医科大学と日本獣医生命科学大学合同の大学祭（医獣祭）を開催しました。8回目を迎えた今年度は「Speciale（スペチアーレ）」をテーマに掲げ、二大学の実行委員が学年・学科・大学の垣根を越えて、多くの学生団体が参加して模擬店や展示、ステージ企画など様々なイベントが催されました。また、オープンキャンパス・付属博物館の特別開館などを含め、3日間で約9,000人、約400匹の動物たちが来場しました！

11月3日は、同窓会によるホームカミングデーでのOBの講演、かつて本学で活動していた赤とんぼ合唱団のOB・OGの方々と教職員の有志による学歌合唱など大いに盛り上がりました！



▲医獣祭イベント



▲オープンキャンパス



▲心れあい乗馬会



高大連携協定 高大連携事業科学実験

今年度は錦城高等学校を皮切りに、武蔵越生高等学校、8校の都立農業系高等学校（東京都立瑞穂農芸高等学校、東京都立農芸高等学校、東京都立農産高等学校、東京都立園芸高等学校、東京都立農業高等学校、東京都立大島高等学校、東京都立三宅高等学校、東京都立八丈高等学校）と高大連携事業に関する協定を締結しました。本学による出張講義の提供、高校生の課題研究活動への協力などで連携していきます。

また、連携事業として夏には高校生対象科学実験、10月30日には錦城高等学校の教職員対象の合同研修会も実施しました。



▲錦城高等学校との高大連携調印式の様子



▲獣医学科 科学実験



▲獣医保健看護学科 科学実験



▲動物学科 科学実験



▲食品学科 科学実験

食品学科が国産チーズのブランド化事業と連携！

9月1日から11月28日の3ヶ月間にわたり、本学が事業責任者として推進している「国産チーズ・ブランド化事業（JRA畜産振興事業）」の普及活動の一環として、北海道の観光情報サイト「ぐうたび北海道」（運営：北海道バリュースコープ株式会社）との連携企画「JAPANESEチーズフェア」を実施しました。本事業の成果である「麹菌熟成チーズ」「ブラウンチーズ」及び「Jチーズスター」を使用したカマンベールチーズ」それぞれがANAクラウンプラザホテル札幌の和食と洋食の両レストランでランチの一品として提供されました！



世界初！麹菌で熟成した日本のオリジナル「麹チーズ蔵（KURA）」



★独特な香りと鯛の旨みとラバの爽やかな酸味が重なり食中酒と相性の良い味わいに



▲麹チーズ蔵（KURA）と鯛の酢漬け有馬山椒添え（ALL DAY DINING MEM）



▲乳肉利用学教室の佐藤薰教授（写真右）と三浦孝之准教授（写真左）

ぐうたび北海道

ANA CROWNE PLAZA[®]

BY IHG

Sapporo

チーズの製造で得られるホエイを有効活用した「ブラウンチーズ」

★こくのあるチーズの旨味、甘味と南蛮漬けの酸味が調和し想像を超えた味わい深い一品



▲ブラウンチーズとおこげの酸味一体（南蛮漬け2種/肉・魚）（和食處 雲海）

第19回JA全農学生「酪農の夢」コンクール 動物科学科が学校賞を受賞

2025年11月28日（金）に開催された、全国農業協同組合連合会 第19回JA全農学生「酪農の夢」コンクールにて応用生命科学部動物科学科が学校賞（優れた作文を多く寄せた学校）を受賞しました。



公式Instagram始めました

日本獣医生命科学大学公式のInstagramを始めました！イベント情報や教育活動はもちろんのこと、学生活動の様子、キャンパスの様子など様々な情報をお届けします。在学生・卒業生問わず投稿してほしい写真や動画は随时募集しておりますので、入試課（kouhou@nvlu.ac.jp）までお問い合わせください！みなさまのフォローお待ちしております！



動物慰霊祭

10月29日、今年度の動物慰霊祭が本学「仁畜の碑」前においてしめやかに執り行いました。動物慰霊祭は、本学の学びや研究に大いに寄与した動物たちに感謝と哀悼の意を捧げるため、毎年実施されています。今年も学長をはじめ多くの教職員と学生が参列し、代表して鈴木学長と学生代表が動物の御靈に感謝と哀悼の意を述べ、参列者が献花を行いました。改めて動物諸靈の冥福をお祈り申し上げます。



ノートPC or タブレットPC
あなたはどっち派？

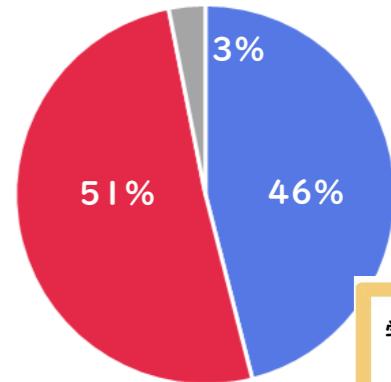


★在学生の声（動物科学科 動物生体防御学教室4年生）

【ノートPC】

- ・Word・Excel・PowerPointなどWindows系アプリを使用する機会が多いので重宝している。課題の作成もしやすい。
- ・重量があり持ち運びに適さない。重たいので気軽に持ち歩けない。
- 【タブレットPC】
- ・紙と大差なく、データ化した資料に直接書き込めるので授業の理解がしやすく、また見直しもしやすい
- ・専用のバッテリType-CのUSBが必要などデータの取り込みが面倒。
- 【これから検討される方向に向けて】
- ・iPadでノートをとる際には「GoodNote」というアプリが便利。
- ・ノートPCを選ぶ際は頑丈さも大事だが、軽量なものを選ぶとよい。ぜひ、参考にしてみてください！

授業で主に使用している端末は？



学生調査2025
【対象】
1,186名

■ 1: タブレット ■ 2: ノートパソコン ■ その他

nichistagram

2025年の思い出



Related Hashtags: #投稿してくださった皆さん #2025年はありがとうございました！ #2026年もよろしくお願ひします！

 nvlu_1013vnzf



第8回 Special 医獸祭

实行委員一同、全力で医獸祭を楽しむことができました！

❤️ 📺 🚀 #医獸祭実行委員会

 nvlu_horse



馬術部 #2026年は午年 🐾

全日本学生馬術大会で34年ぶりに優勝しました！

❤️ 📺 🚀 #馬術部

 @lizard.woi



第8回 医獸祭

開催日時：11月1日(土)・2日(日)・3日(月) 晩
9時30分～16時30分

❤️ 📺 🚀 #紫孔雀 #第8回医獸祭表紙絵
特別な自分らしく飛ぶ孔雀を表現しました。



 @inu_30kg



冬の海 #砂浜ダッシュー #どろんこ
初めて海辺でお散歩しました！

❤️ 📺 🚀 #冬の海

第82号表紙絵
澤口 凜 さん(獣医学科5年)
ぱっと目に入った時にちょっぴり笑顔の溢れるイラストにしました。博物館に立ち寄るのも私の小さな楽しみです。



大学報「nichistagram」
に載せられなかつた写真は、本学
公式Instagramにて公開しています！



Hello,we are NVLU(ニチジュウ) -日本獣医生命科学大学報-第82号(2026年1月号) 2026年1月19日発行

協力(以下敬称略)／教職員：鈴木浩悦学長 戸澤あきつ 近江俊徳 嶋本樹 氏家誠 道下正貴 三浦孝之 片山欣哉 佐藤薰

学生：岡圭史郎 澤口凜 水谷あおい 市川美波 卒業生：阿部慎太郎 団体：馬術部 医獸祭実行委員会

その他ご協力いただいた皆様ありがとうございました！

表紙／澤口凜

編集・発行／日本獣医生命科学大学 入試課:大沼友美 右田麻衣子 成相亮平 堀碧衣 菅原崇文 印刷／デジタルブレンド株式会社

